

## 寄 稿

# 理学博士清樓幸保先生を迎えた 野鳥の観察記

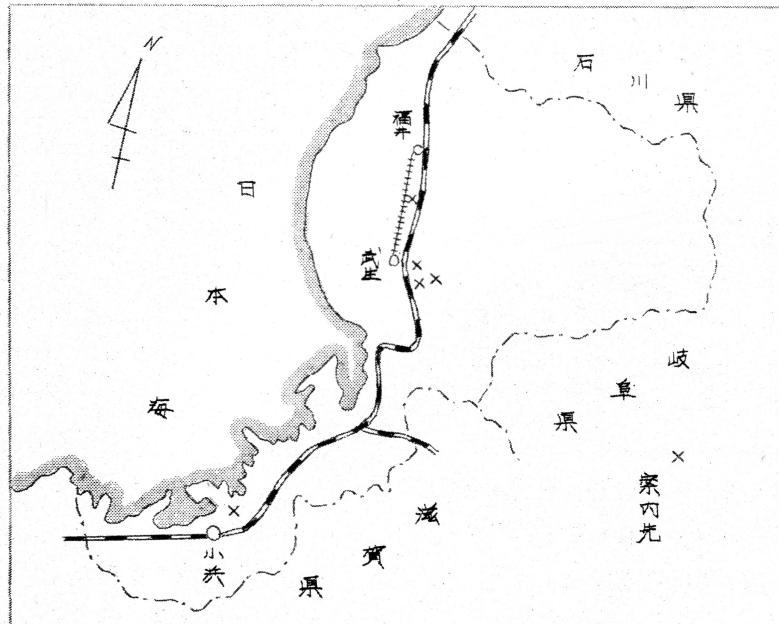
福井県林務課狩獵係 茂師 本間 勝

1. はしがき
2. 武生の電柱に住みついた鳩等の野鳥の繁殖状況
3. 鶴江市西野区における鳩類の繁殖地
4. 小浜市で三羽の雛を育て上げた鳩

### 1. はしがき

昭和32年5月3日、東京で開かれた鳥学会総会の席上、「コウノトリ武生市に住みつく」と題して報告された、林武雄、東谷薰両氏から、本県における野の鳥の繁殖状況を撮影のため、日本鳩類大図鑑の着者、宇都宮大学講師清樓博士が近く福井へ来られると知らせを受けていたが同月24日のこと、林君から筆者に直絡があり5月25日の早朝清樓博士が武生に下車されるから同日午前8時までには必ず武生駅前におち会おうとのことであった。又26日、約束の時刻には林君の外電田竜三郎君も来られ、筆車と三人が案内役をつとめることとして専士が休憩されていた駅前の内田旅館を尋ね、このたびお出になつた雨件や日程を伺つたところ、「大学の依頼でこの春から1年間の予定で日本鳩類の四季と題して、各地方の鳥をフィルムに撮ることになり、京都からやって来たが福井では、是非コウノトリとサギ類の繁殖地を見せてほしい」とのことであった。そこで案内役の我々は時間と案内場所を考え案内コースを打合せ、まず武生市の天船で電柱に巣ごもりしたコウノトリの巣と、日野橋上流にある日野川原でコアシサシ、チドリが群をなして繁殖している状況を見た後再び武生に戻り、午後は鶴江市西野における鳩類の繁殖地の案内をしてから武生駅発上りノ6時ころの列車で小浜に赴き、翌又27日前は小浜市の羽賀で繁殖したコウノトリを案内し、石川県に向まれる博士と教員で別れる順路をとることにした。

何分専士は、日本の野鳥については造詣が深いで、御期待に添えるかどうか心配したが専士は「来てよかつた、意外な収穫を得た」と別れの車窓から別れを惜しまれた程であったことは、案内役を努めた我々にとって喜びにたえなかつた次第である。



2. 武生の電柱に住みついたコウノトリ等の野鳥の繁殖状況、心配された  
又8日の天候は幸にも晴天だった、我々は喜びの笑いと共に、朝8時30分頃身仕度を整え、望遠レンズや荷物を分けて武生市を後に矢船へ向つた。まず矢船では「武生のコウノトリ」で大変

世話をなつた松村庄太郎さん、区長の野村与助さんを訪れたが博士から懇意の意を告げられた。ここでは松村庄太郎さんの養男の銀鳥も案内に加えて博士と一緒に武生のコウノトリについて説明をした。松村氏の前庭先に備へつけてあつた北日野中学校提供の天文用望遠鏡に眼をとめ、無精卵に失敗して鳥のいない淋しい電柱の巣を撮影される博士が「こここの地形は兵庫県の天然記念物コウノトリの繁殖地、豊岡の地形によく似ているよ」といわれ「こんなもつづけて鳥の保護に努めてほしい」と語られた。略儀に幼く走った百姓は我等一行を見て「鳥がいなくなつて本当に淋しい、外來の人間に話す説明も上手になつたのに鳥が去つて淋しく、鳥だけでは云々」と話すのだった。矢船の人達の口惜しそうな気持ちが充分受けとられて、我々も又何とも言えない淋しい気がした。

帰る路すがらコウノトリの餌み先や水浴び場、又区、市、野鳥会福井支部が掲出した立てなどのことを語りながら矢船部屋に戻つたころ、松村銀鳥は、数日前を見たという田植後の水田に鳥の巣があり、卵もあるので田の持主にさわらぬよう伝えておいたが、その巣を見てくれといつて案内してくれた。鳥は逃げていなかつたが巣の中には黄灰色の地に粗大な斑点のある卵が4個あつた。「鳥を見なければ判らないがシギだだろう」と博士はいふ。なお言葉を續け「鳥をおどろかしてはいけない、これより河原を見せて貰いその次にジンクリと鳥を持つて調べることにしよう」といつて日野川へと急いだ。河原には浅瀬と渡つて行つたが人の気配にコアジサシもコチドリも騒ぎ出して、飛び立つては砂利原に下るのだった。この篠岡約繁殖地に、博士は全く気をよくして暫らく様子を窺い、コアジサシやコチドリの幾つかの巣を見出し、卵のないもの、産卵、2、3個のもの又抱卵中と思われるものなどに目標をして、ここを離れブラインドを

張られた。我々案内者は遠慮して遠くはなれて眺めることにした。望遠レンズを付けて撮影が始まる。又小型写真機でも何十四となく色々な状態を撮られていた。当然鳥の雰囲気よりも字されたことであろうが一々愈入りに撮られるので鳥車には気の毒などと思われるほどだった。撮影を終つてから遅草を吸いながら、我々に手まねきで各図をされたので近寄ると大変満足な様子で微笑をしておられていた。イカルテドリにセクロセキレイの巣もここで発見が出来た。一行は堤防ぎわまで直いで何んでいると下流の上空から一羽のミサゴが高く或はひくく飛んで来た。向側の庵川草むらではキジが鳴いている。又カルカモも舞い上る。堤防のカヤワラではオホヨシギリが行ア子、行ア子と並んで遙れた場所が聞える。この外川原ではツバメ、コシアカツバメ、スズメ、モズ、ハシボソカラス、トビ、ゴイサギ、ヒバリ、ホホジロ、キジバトなどの姿や鳴きも聞えるのでよい探鳥会も出来たわけである。ここでは予定の時間をはるかに過ぎたので急いで、さつき松村君が教えた鳥の巣を調べようと足を早め双眼鏡で眺めたとき、博士は「鳥が戻っている。しめた！」と口外に漏らし、更に見きわめてから「あれはタマシギだ、タマシギの抱卵だ。あれが本当の抱卵の姿勢だ」と鳥の生態を語り、京都でも撮つて来たがこれが本当の抱卵の姿だと喜んで写真機に望遠レンズをつける操作が始った。松村さんは「よいものを見せてくれた」とお礼をいわれたが、松村さんとはここで別れ、武生に戻ることになった。

日野橋を渡つた矢先日野川の上流へと飛び去る／羽の小鳥を博士は指して「アレはキアシギだ、渡り初めだな」と語られた。キアシギは上羽根の色が汚灰色で脚は汚黄色に見えた。海浜に渡来する旅鳥であるが初めの兎分であつた。

### 3. 長崎市西野区における鷺の繁殖地

午後ノ時ノ从ふの急行福武電車に乗つた一行は神明駅に下車した。案内先は近いので徒歩で西野妙法寺に着く。武生からの車中で長崎方面と判つてから、博士は長崎周辺には若いころキジ稚に又、3度も来て居り地形はだいたい想像がつく。そのころキジは隨分いたが今はどうかと尋ねられた。そうしてあちこちの山が想い出になつた等、筆者にしきりに当時の話をはなすのであつた。

妙法寺の境内に入ると御堂の裏手には形の老樹を混えた竹藪がある。ここにはコサギ、チユウサギ、チユウタイサギ、ゴイサギ、オオサギが混つていて凡そ千羽は下るまい。この半数は雌で繁殖中だから騒ぎは時にそろそろしく、地上には多くの卵の抜け殻や脱糞、それに落した生餌の腐敗で青蠅もたかっていて惡臭はフーンと鼻をつく。この寺内には沢山の墓があつて墓参りには大きな迷惑とは誰れも気づかう筈である。何時脱糞がふりかかるかわからない状況で仕事が悪い。傾けはスタート時の上部に鷺の糞なり、糞材や糞を運ぶもの、飛び立つものでクワー、クワー、クワー、又はゴア、ゴア、ゴアゴアの鳴声は実に喧しい。ここは案下でも鷺の繁殖地として古い箇所である。博士はここを一周してから、実によい所を案内してくれたと感謝された。これから寺の裏根へ上

って撮影したいので住職に了解を求めてほしいと頼まれた。すぐ和尚さんに断り又梯子も借り受けた。博士に続いて竜田君の二人は尾根に登り撮影にとりかかった。途中博士は車着にここにアマサギの一巣がいるよとアマサギを指すのでした。地上の車着は樹枝や鷺にさえぎられて迷っていると、詳しく所在を教えられた。車着にとつては初の見ものであった。早速メモに記し意外の発見となつたことである。そのころ坊さんも寺の屋根には百が生えているので危いと気になってやって来た。夫人も来られて危険ですからと注意があつた。鳥好の方と判つてうなづかれた。車着はこの御両人様にアマサギという鳥は南方の鳥で、山陽地方には毎年他の鷺に混つて渡つて来るが、本県では珍らしいことだと知らせておいた。

アマサギは冬期全羽雪白色であるが、養殖期に入ると頭部から上胸部まで橙黄色となり、黃金色の美麗な飾毛となつていて白鷺とは一見して判別が出来るものである。

地上の車着がたい風となつたころ、屋上から下りて来た博士は「有難う絶好の場所でした。充分撮つたよ」と喜んでおられた。

#### 4. 小浜市で3羽の雛を育て上げたコウノトリ

5月29日、午前9時車で小浜市羽賀の現場に着く。ここでのコウノトリ巣見は武生のコウノトリ発見で轟んに宣伝されたことが発見の原因ともなり、羽賀の人で海朝幼稚園に通う藤田貞子さん(又々オ)の発見によるもので、これを小浜市白鷺並木純さんによって報道されて世人を喜ばしたものだ。ここでの鳥は3羽の雛が完全に育つていて内1羽は若鳥というほど発育していたのである。鳥は羽賀の地蔵で小浜から羽賀部落に至る途中の山ぎわの道路から100メートル上り、山腹の40年生の松の木で巣結したものである。

車から下りて見上ると、巣には1羽の若鳥が母親鳥に守られて佇んでいた。平和なすばらしい姿であつた。車着はこれに見とれて「実にスバラシイ!!」と思わずつぶやいたのを覚えている。博士も「これは又ステキだ」と狂い鳥となって写真機を取り出すなどうろたえて見えた。地上撮影が終つてこれより山の尾根に上る。道なき柴を踏み分け音を立てず尾根に着く。巣の真上、尾根より真下に見下す所を送んだ。尾根ではここと他の1個所も送んだ。巣の間からレンズと双眼鏡のみはみ出して身かくしの姿勢であつた。尾根から見下しつた巣は産座を除き何れも枯れた樹枝で出来ていて、産座には更に雛が2羽背を合し仲よくうづくまり、動こうともせず、前に申したとおり巣の外縁には1羽の若鳥は親鳥に守られて立っていた。誰もこの様子にはア立派だとかステキと叫ぶことであろう。博士は有頂天となって、しんけんに時には笑みも浮べて自動フィルムでほしい尽に撮られていた。幾度も地上からと尾根からと充分に撮られる。こんな処はないぞと、この愈まれた幸運に喜び準備したフィルムは使いはたされた様子であった。思えば再びと得難い機会と思われていたことであろう。撮影が終つてほととしたころ、下から汗を流して尾根に登つて来た鷺並木氏は巣内された福井、朝日などの新聞記者と博士

との間に応答の一ときを過されたのであった

さてこれより筆者が尾根で眺めた鳥の生態を少し纏めて見よう。兼を見下した巨雛は3の木もあつたろうか、何分鳥の大きさはツルほどあつて、兼は又木もあるので全く手に取るようだつた。お母さん鳥に守られていた3羽の雛の姿を見て、鳥の強い母性愛と親鳥の御苦労さんに気付かされるのであつた。母親鳥はしきりに首を左右、上下に動かし殊に下方の直路を注意しているようだつた。雛の姿は優らしく、田には少女も混つた田植姿も見られ、そして山々の緑が鳥の白との調和は美しい光景だつた。この様子に見とれているころ雄大なお父さん鳥が嘴には柔い兼脇をくわえて、大きな翼をふねり、ふわりと緩慢な飛翔振りで兼えと飛んで来た。やがて兼に立づいたと思うと脚をだらりと下げて降りるのであつた。このことがこの鳥育雛中でも兼材を置んでは、兼の増補や修理することを確められた一つであつた。雄鳥は若鳥を中心に雌の反対に立った姿も見て又來があるのである。立っていた若鳥の姿はやつれた親鳥とちがつて羽毛はきれいで脚の黄色にも若々しく美しかつた。この山には多くの柴が散つていてこれが當兼に役立つたと感じたことであり、こんごコウノトリの構築においては附近に兼材を供給することは鳥の保護に必要であると知つた。

ノの時半ころコウノトリの兼へとノ羽のトビが襲つて来た。これと知つた親鳥はヒリツと身振りをし、危険と知つた若鳥は産座に下りて、うづくまつた又羽の雛の傍に羽を縮めて状すように縮みこんでしまつた。親鳥は静かに両翼を半開きして威嚇の態勢をとつてから、体を雛の方に向け、首を伸して上下の嘴を叩き合わせ大きくカタ、カタ、カタカタカタ…………と金属性の音を続けるデスフレが始まるのだつた。こうした鳥の警示に終にトビは怖れをなしてか旋回し逃げ去ってしまった。この様子では何時どんな外敵の襲撃があるかも知れないので少しも油断出来ないコウノトリの親連の苦労が察せられた。筆者の頭上空には今襲つて来たトビの外に又羽が廻つてゐる。サシバも時おりキンマー、キンマーと鳴いては飛んで来る。それに悪戯子のカラスも々、ゞ羽混つていて嫌な気になつた。林にヒーー、ヒーーと暗くトビの声には気が見てなかつた。コウノトリとトビの戦が終んで冷戦となつてもコウノトリのデスフレーは長く続き警戒を緩めなかつた。身辺ではヒヨドリ、ホホジロ、スズメ、キジの発情した鳴き声が聞えていた。やがて西南の風が次第に強めて兼上の親鳥の風切羽を吹き上げ出した。こうしたところから親鳥は兼の廻りを右から時には左からと見廻る様子も見せてくれたのである。本当に母親鳥は全くやつれて見えた。兼の外茎は鳥の脱糞で白く光つてゐた。博士の撮影が終り残つた柴から四つの頭が浮び出ると、鳥は気付いて又デスフレーを始めた

このたびは見習れない人だつたか雄鳥は兼から飛び立つた、続いて雌も飛び出し兼上を旋回するのであつた。私は思ひでここを遠ざかり暫らく鳥の雄らしい飛翔に見とれ、これぞ人の心を引きつけるコウノトリと知つたことであつた。ただコウノトリ親鳥が雛え飼を運ぶ給餌と「ヒーッ」とコウノトリのかずれた鳴が知られなかつたことは返す返すも残念に思われる。